



「検証 戦争と気象」

半澤正男 著

株式会社銀河出版、平成5年5月
発行 237ページ、定価1800円

昔から、天候の変化とは、魔詞不思議な物と思われ
ており、その推移を予測することは「神がかり」とさ
れていた。古来、そして、今でも、「一寸先は闇」なの
である。このような未来に対する不確定性をもっとも
影響を与えるものは、小さくは、個人個人の生命を、大
きくは、国の命運をかける戦争という現象であろう。
本書では、このような戦争において気象現象の及ぼし
た例を集め、解説を加えてある。

内容としては、日本編として、1886年の新鋭巡洋艦
「畝傍」の沈没事件、「本日天気晴朗ナレドモ、波高シ」
の電報で有名な1905年の日本海海戦、1935年の第4艦
隊台風遭遇事件、1938年の西太平洋一大海洋観測、1941
年のハワイ・真珠湾攻撃、1943年キスカ島撤退、1944
年の米艦隊の台風遭遇事件、そして、1944年の風船爆
弾と8件の例が集めてある。海外編としては、紀元前
480年のサラミスの海戦、1805年のトラファルガー海
戦、1854年のクリミア戦争、1942年のロンメル・モン
トゴメリーのアフリカ戦線、1944年のDデー、そして、
1944年のバルジ大作戦の6例が収められている。

記述は平易で、復元された天気図も数多く収録され、
当時の状況を理解するのに役に立つ。また、台風、濃
霧、波浪、海陸風、砂漠気象、停滞前線など、いろい
ろな気象現象を取り上げている点でも興味深く読むこ
とができる。

このような中で非常に印象的であったのは、キスカ
島撤退時の、「竹永小尉」が必死に発見した「プラス2
のセオリー」(北千島に濃霧がかかると2日後にキスカ
が霧になる。この確率は90%以上である)である。「何
百、何千の同胞の命が懸かっているときに、何等かの
判断を下さなければならない」ということは大変なこ
とと想像される。そのような状況の中で、過去の資料
を読破し、ある種の決断を行ったと言うことは、正直
言って、「昔の人は偉かった」と驚嘆する。

次いで、印象的なのは、やはり、Dデーをめぐるド
ラマであろう。潮汐の条件から、6月5日からの3日
間しか可能性が無いとされていた。その中で、気象条
件から日時を決めなければならない、即ち、気象・海
象の条件が最後の決め手となったということである。
そこで、両者の気象将校の出番と言うわけである。連

合側はイギリス気象局で長年予報官を勤めた現場の
ヴェテラン、対する、ドイツ側は、博士号をもつ学会
の権威、という対比も、日本人好みである。もっとも、
天気に関する認識は、連合側もドイツ側も同じ様な
もので、事実、悪天の天気予報はドイツ側にも出てい
た訳で、両者の気象将校の資質の差が勝敗を分けた訳
ではない。勝敗を分けたのは、連合側は、上陸作戦
を成功させようと必死であったのに対し、ドイツ側は、
防衛という守勢であったこと(それに伴い内部的な不
統一が露呈し始めたこと)、そして、「こんな悪天では
上陸しないであろう」という希望的観測が支配的であ
った事などであろう。一言で言えば、時の流れが勝
敗を決めた、と言えなくもない。

このように考えると、この本の中には、基本的によ
く分かっていない自然現象を相手にして、気象学的知
識と個人の英知を最大限に用いて行動して成功した
例、あるいは、失敗した例が集めてあるわけである。
特に、気象を専門とするものにとっては、「如何に気象
が重要か(そして、その割には、現在の日本では気象
に対する投資が少ない—これは評者の読み込みであっ
て著者は一言も明言はしていない)」というメッセー
ジが読み取れる。さらに、読みすぎかもしれないが、評
者には、基本的に個人が(例えば、日本海海戦の岡田
武松や個々の戦場における気象将校や予報官などが)
華々しく働いた時代を強調しているように読める。そ
れは、現在の機械化が進み匿名性の強まった気象事業
に対する感傷かも知れない。最近の、例えばイラクに
対する戦闘などではどうであったか、が書かれてい
ると、一層興味深く読めたことであろう。ともあれ、評
者の読み込みが、当たっているか、否か、会員諸兄の
一読を勧める。

最後に、一言触れておこう。本書は、戦闘に於て、
気象学の知識の重要性、あるいは、その役割を強調し
たのであるが、過剰に気象の重要性を強調する危険性
を指摘して置きたい(もちろん、著者に責任はない。
しかし、著者の意図と無関係に著作は歩くこともある
ので、老婆心ながら書き添えておくのである)。

例えば、気象の情報を正しく使うも、使わないも司
令官、あるいは、参謀などの指導部の能力である。恐
らく、実際の戦闘では、気象将校が正しく情報を提供
したのに指導部の無能故に無に帰した例も多いこと
と思う。実際の戦闘や社会の現場では、総合的な能力が
物事を決めているのであって、一つの側面だけを強調
するのは、話としては面白いが、それを信ずるのは危

険がある。本書の中でも、台風が艦船に及ぼした被害のことが書かれている。日本海軍は、第4艦隊事件を契機として、「第4象限の秘密」を手にしたのに対し、この秘密を知らない米軍は、台風巻き込まれて沈没したとされる（ハルゼー提督の第3艦隊四分五裂の章）。このような台風の及ぼした艦船に対する被害を知っているとすると（もちろん、日本人の多くは元寇

の時の神風を知っている）、戦局がうまく行かなくなるにつれて、「神風が吹く」と信じこんでゆく心理状態が分かるような気がしてきた。

バランスのとれた合理的な思考を社会的に維持してゆくことが重要であろう。

（東大気候システム研究センター 住 明正）

編集後記：編集という仕事は、原稿の細部にわたる技術的事柄に対するチェック、著者および編集事務局との連絡、等、細かい技術的仕事が大部分を占めますが、一方、新しい企画を立てたり、既存の企画の中でも原稿を依頼する人を選んだり、等、創造的部分もあります。また、編集委員には、投稿された論文の掲載採否を決定したり、依頼した原稿であっても内容に問題がある場合は書き直しをお願いしたり、等、責任が課されており、その責任の重さに気が引き締まる思いがすることがあります。一方、投稿された論文、記事の内容および形式の完成度、著者との応対から、著者の仕事振り、人柄が推測でき、良き著者との交流を楽しむこともあります。編集者は、担当する文章、本の最初の読者でありまして、様々な分野の本を読んでおりま

すと、良き編集者に恵まれた本の質が良いことがわかります。「天気」の質の良さを維持すべく、また、質をより良くすべく、編集委員の一人として努力しているつもりですが、「天気」読者の皆様の「天気」に対する御意見をいただければ幸いです。

私事にわたりますが、勤め先が東京からつくばへと変わったばかりで、愛用のマッキントッシュのセットアップが済んでいないためにワードプロセッサが使えず、久しぶりに原稿用紙に向かって手書きでこの原稿を書きました。修正が容易でないので緊張しました。「天気」編集の仕事も新しい気分、意気込みで臨むつもりです。よろしく。

（神沢 博）